２０１９年８月１０日（土）

老球の細道４９６号

猛暑の中の情熱

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

中学生や高校生の試合でチンタラチンタラプレイをして、絶対に全力を出さず、常に一生懸命プレイしないことを是とするようなチーム、プレイヤーを「大人のバスケットボールのようだ」と評する人がいる。そのような人達、そのように思ってプレイしている大人のチーム、そしてその予備軍となりつつある中、高校生には、今年度の福島県国体成年男子チームのゲーム、そしてバスケットボールに対するひたむきさを是非見てほしい。

８月３日（土）４日（日）と会津高校において今年度の「茨城国体」福島成年男子チームが合宿練習を実施した。山形、新潟、栃木の成年男子代表、宮城県の東北学院大学などが終結し、リーグ戦を行った。外気温は３７℃を超す猛暑、体育館の中もそれ以上に感じる灼熱の体育館で行われた。私は昔から夏の暑さには強かったが、今回はさすがに軽い熱中症になってしまった。ゲーム観戦に熱中してしまったのも原因である。

そんな悪コンデイションの中でも長時間ゲームを観戦できたのは、会津高校の大内先生（県選抜 H・C）率いる成年男子チームの素晴らしい戦い方を目の当たりにしたからである。数年前の私が知る成年チームとは別世界のチームに変身していた。現在のひたむきな高校生チームよりさらにワンランク上のひたむきさを携えていた。「一生懸命走り、一生懸命守り、一生懸命声を出す」。バスケットボールの基本中の基本を、あの猛暑の中、大人のチームが悲壮感など見せず、楽しく一生懸命取り組んでいた。

試合結果は全てのゲームを 20 点差からダブルスコアの圧勝であった。ビックマンやスーパースターなど誰もいない中、一人一人の意識の高さと全員でタイムシェアのできる総合力、そして選手の持ち味を生かした緻密なゲームマネジメントを意識するコーチングスタッフの力は群を抜いていた。

このようなゲームを間近で観戦できた会津高校バスケットボール部は幸福の王子、王女様であろう。会津地区内で観戦していた大人のバスケットボールのイメージが根底から覆されたことと思う。大人とは子供以上に熱く、ひたむきに燃える存在なのである。

国体チームのゲームを観戦した翌々日、会津高校に練習指導を依頼され出かけた。この日もまた猛暑であって、私自身が集中力をキープできるかどうか心配だった。しかし、体育館に入った途端選手たちの元気な挨拶の声に私もスイッチが入り、頭の中には久々に「ロッキーのテーマ」が鳴り響いた。怒りに燃えてスイッチが入る時は高倉健さんの「♪網走番外地」「♪唐獅子牡丹」が今でも鳴り響く。少年時代は永遠である。

会津高校生の練習に取り組む姿勢も多くの高校生、中学生、小学生の見本である。今はなかなか勝てないかもしれないが、そのような状況にあっても屈せずに自分たちのアイデンティティを保つことがすばらしい。このような伝統を作ってくれたのが今は亡き菊地長康先生と外部コーチであった中根茂治大先輩である。なんとその中根茂治大先輩が８４歳の高齢にもかかわらず今日も母校の体育館の片隅に陣取り後輩たちの練習を見守っていた。　先輩の願いはもう一度母校の優勝する姿を見ること。何歳になっても子供心を失わない超大人がここにもいた。私も棺桶に片足をシュートするまでそうありたいと思った。

「暑かったら、もっと熱くなれ、そして、人間的にさらに厚くなれ！」